

✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門 エッセンス セミナー



奥田 あや 三段

time 1

囲碁は簡単

はじめまして、奥田あやです。今月号から六ヶ月にわたって、この入門講座を担当することになりました。どうぞよろしくお願いたします。

私は5歳で囲碁を覚え、すぐにこのゲームの楽しさの虜になりました。その思いが高じてプロ棋士という職業に就いたのですが、この素晴らしいゲームを一人でも多くの方に知っていただくことが、私の棋士としての使命でもあると思っています。

そして本講座は、次に記す二種類の方を対象としています。

①これから囲碁を始めようとしている入門者の方

②これからどなたかに囲碁を教えようとしている方

実はこれまで囲碁は「最も入門が難しいゲーム」と言われてきました。

将棋は「相手の王様を取る」という分かりやすい目標がありますが、囲碁は「囲った陣地が多い方が勝ち」と言われても、なんだかピンと来ませんよね。入門しようと思ったものの、この点が理解できず諦めて去っていく人が実に多く、また入門者を上手に導けず、無力感を抱いておられる指導者の方も多いことと思います。

ですが、心配ありません。

確かに将棋に比べれば目的が今ひとつ明瞭ではないかもしれませんが、それはあくまで比較論であって、囲碁自体は決して難しいものではありません。これからお話ししていく手順に従って覚えて（教えて）いただければ、苦勞することなくスムーズに囲碁が打てるようになります。

Profile おくだ あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第4回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

冒頭でも触れたように、5歳の子供でもまったく違和感なく覚えることができるゲームです。「囲碁は難しい」という先入観を取り払って、気楽な思いで読み進めて行ってください。

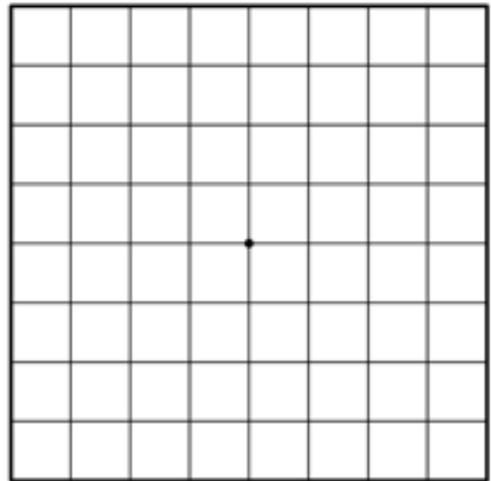
内容としては「九路盤」という小さな碁盤を使い、ゲームの始め方から終え方までをナビゲートしようと思っています。

つまり六ヵ月後には、九路盤で囲碁が打てるようになるということで、その頃には「囲碁って面白い」「もっとたくさん囲碁をしたい」と思っていることでしょう。

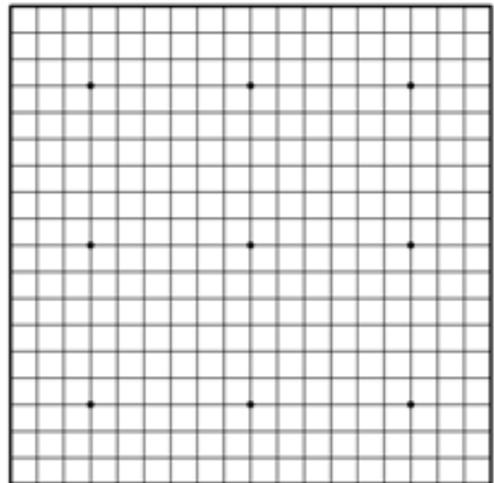
というわけで、1図が九路盤です。

正式には2図の十九路盤を使うのですが、この碁盤は入門者にとってはあまりに広過ぎ「囲碁は難しい」と思われてしまいかねません。ですから入門者の方には、まず九路盤で基礎を学んでいただくのが一番だと考えます。

そして九路盤でしっかり打てるようになれば、大きな碁盤へも問題なく移行できます。十九路盤に進む前には十三路盤という碁盤もあるので、徐々に大きな碁盤へとシフトしていくのがベストでしょう。



1 図



2 図

***** 九路盤セットと十三路盤セットのご紹介 *****

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真①の九路盤セット(¥1,470)は、裏は七路盤として、また写真②の十三路盤セット(¥5,250)は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



①九路盤セット ¥1,470



②十三路盤セット ¥5,250

- 本院
千代田区五番町7-2
JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分
- 八重洲囲碁センター
中央区八重洲1-7-20 八重洲口会館9F
(東京駅/八重洲地下街直通)
- 関西総本部
大阪市北区角田町1番12号
阪急ファイブアネックスビル6F
- 中部総本部
名古屋市中区榑木町1-19
- 日本棋院通信販売センター
TEL 03-3288-8788 (平日9:00~17:00)
FAX 03-5275-6844 (年中無休 24時間受付)
- 日本棋院オンライン囲碁ショップ
<http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/>

交点に打つ

では、いよいよ具体的な入門のお話を始めていきましょう。少しも難しいことはないのです、どうぞ気楽に読み進めて行ってください。

囲碁とは実に自由なゲームで、始めるにあたっての大前提となるルールは、二つしかありません。

①黒番と白番が一手ずつ交互に打つ

②碁石は線と線が交わる交点に打つ

具体例として3図をご覧ください。

黒1、白2、黒3、白4といった具合に一手ずつ打っていくわけで、石を打つ場所がマスではなく「交点」だということです。

さらに黒5、白6のように、碁盤の端にも打つことができ、黒7、白8のように、カドにも打つことができます。端っこなので線が途切れてしまっていますが、これも「交点」ということですね。

そしてここが「自由なゲーム」と言われる理由なのですが、ある例外（次々回となる6月号あたりでお話しする予定です）を

除き、どこに打っても構いません。打ちたい所に打っていいわけで「ここに打たなければいけない」という制約がいつさいないのが、囲碁の素晴らしいところだと、私は思っています。

囲った陣地の多い方が勝ち

どこにでも打っていいという、着手に関するルールが分かったところで、次は「何を目的に打てばいいのか」という、勝敗に関するルールのお話です。

これもまた実にシンプルなもので、

・**囲った陣地の多い方が勝ち**

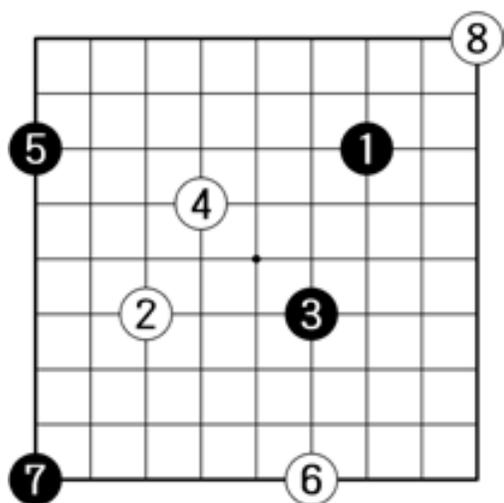
ということになります。

具体的に説明しましょう。4図をご覧ください。

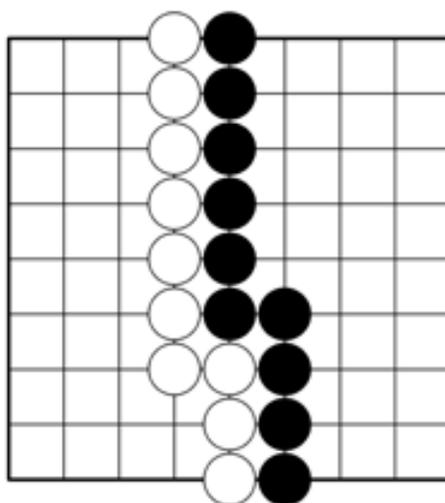
碁盤の右側が黒の陣地、左側が白の陣地です。

つまりお互いの石によって、陣地を囲ったわけですね。この囲った陣地の面積の多さを競う——これが囲碁というゲームの目的で、要は、相手より大きな陣地を囲えばいいということなのです。

では、どうやって陣地の大きさを数えれ



3図



4図

ばいいのでしょうか？

ここで再び「交点」が登場します。面積の広さの単位が、この交点だということなのです。[陣地の広さを数えてください]と言うと、マスの数で数えてしまう方がおられますが、そうではないのでご注意ください。

もう一度4図を見ていただいて、黒白それぞれの陣地の中に、交点がいくつあるか数えてみてください。

では、5図を使って答え合わせをしましょう。

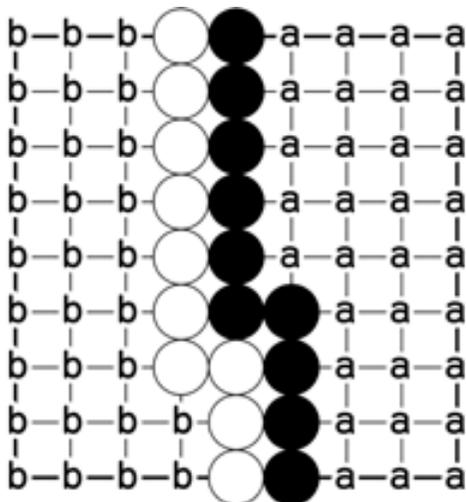
黒の陣地がいくつかというのは「aがいくつあるか」ということですよ。答えは「32」となります。

続いて白の陣地は？ 即ちbの数ということになりますが、答えは「29」ですね。

黒が32で、白が29ということで、この勝負は黒の勝ち——これが囲碁における勝敗の決め方です。

そして用語の説明もしておきますと、陣地のことを「地」と呼びます。従って、黒の陣地のことを「黒地」、白の陣地のことを「白地」と呼ぶわけですね。

また「地」の面積を数える際の単位とし



5図

て「目」という用語を使います。1目、2目、3目……と数えていくわけです。

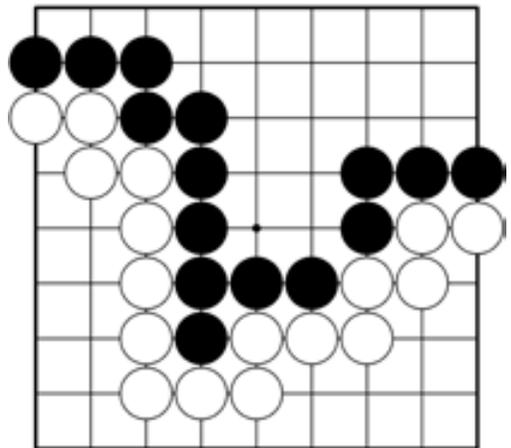
以上の二つの用語を踏まえて、5図の結果を言い表してみますと、

「黒地が32目で、白地が29目。従って黒の3目勝ち」

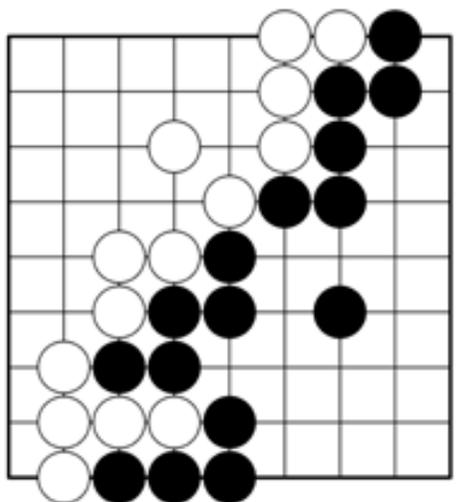
という言い方をすることになります。

ではこの要領で、練習問題をしてみましょう。

第1問と**第2問**の地を数えてみてください。それぞれ、どちらの何目勝ちでしょうか？



第1問



第2問



前ページで出題した二問の解答です。まずは第1問の答え合わせを**解答1**で。

上半分一帯の黒地が24目です。繰り返しくなりませんが、盤の端っこ（盤端、と呼びます）も数えてくださいね。

そして下半分一帯の白地が25目。従って「白の1目勝ち」が正解となります。

では続いて、第2問の答え合わせを**解答2**で。

右半分一帯の黒地が26目。左半分一帯の白地が25目なので「黒の1目勝ち」が正解です。

いかがですか？ 地の数え方と、それに伴う「勝敗の決め方」がお分かりいただけただしょうか？ 囲碁というゲームの最終目的である「囲った地が多い方が勝ち」とは、このような意味だったのです。



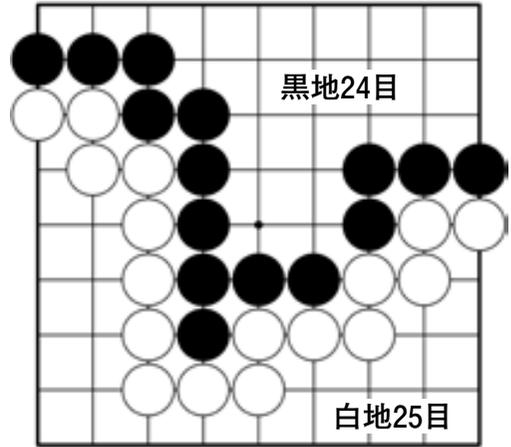
ではさらに、地を数えることにチャレンジしていきましょう。

これまででは上半分vs下半分とか、右半分vs左半分といった具合に、それぞれの地が1カ所ずつしかありませんでした。しかし実戦ではそのように二分して終わることばかりではありません。

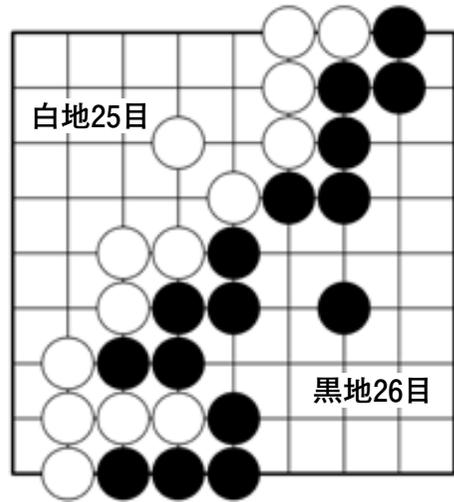
第3問のようにお互いの石が混み合って、黒地、白地とも2カ所ずつできることもあるのです。このパターンで、どちらの何目勝ちであるかを数えてみてください。

これまでに比べるとやや複雑になりましたが、やることはまったく同じです。

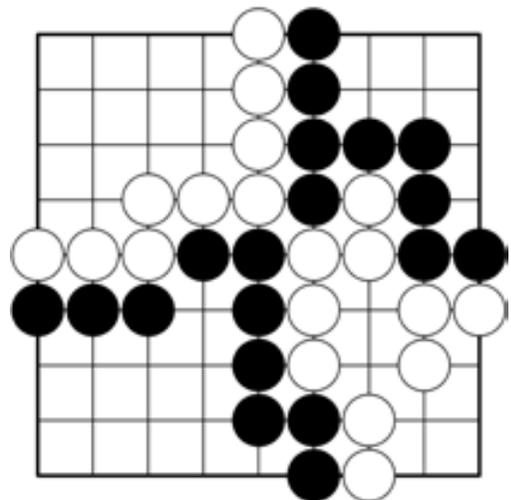
こうして地を数えることが、最初は面倒で難しく感じるかもしれませんが、回数を重ねることですぐに慣れ、そのスピードも速くなります。今はゆっくりで構いませんので、正確に数えられるように努力してみてください。



解答1



解答2



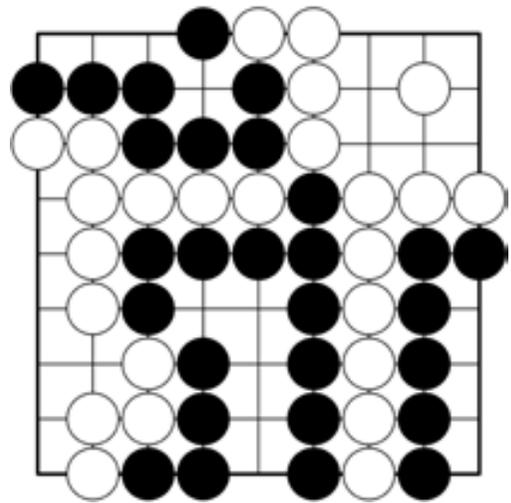
第3問

いかがでしょうか？ もうお分かりですよ。

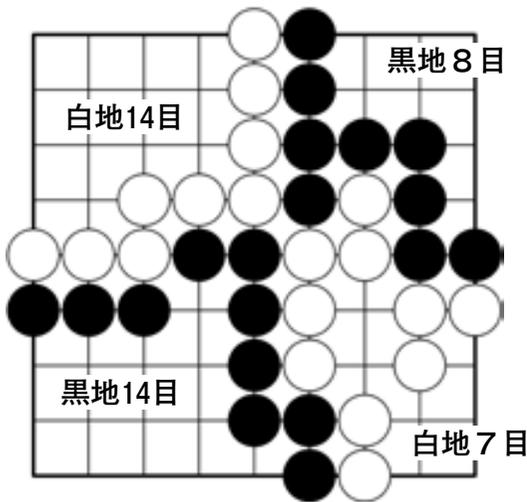
解答3 黒地が8目+14目で、合計22目。そして白地が14目+7目で、合計21目。従って「黒の1目勝ち」が正解です。

では引き続きこの調子で、どんどん練習問題を解いていただきましょう。**第4問**と**第5問**です。

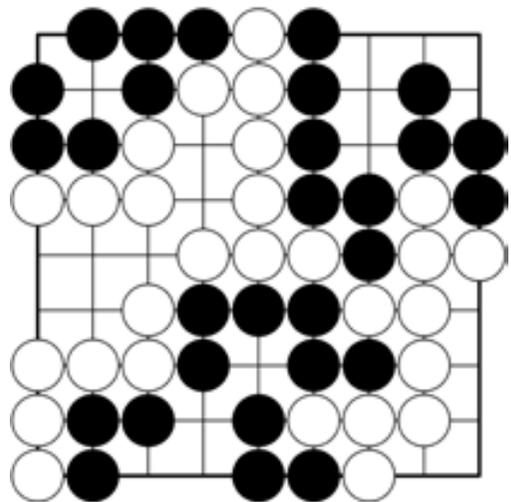
どちらの問題も陣地が細分化され、いよいよ「3カ所(黒地)vs. 2カ所(白地)」になりました。



第4問



解答3



第5問

私と囲碁の出会い

冒頭で触れたように、私が囲碁を始めたのは5歳の時でした。祖父が教えてくれたのです。

私は四人兄弟の三番目（兄、姉、弟がいます）なのですが、なぜか祖父は私にだけ教えたのです。理由を聞いたことはないのですが、自分なりに推測しますと、私が人一倍の負けず嫌いだったからではないでしょうか？ そ

れこそジャンケンで負けても大泣きするような子どもだったので、祖父は「この子は勝負事に向いている」と考えたのだと思います。

祖父のこの見立て(?)は大正解だったということですね。囲碁はそれまでに体験したどんなゲームよりも面白く、私はすぐに囲碁の魅力にとりつかれました。そして「好きこそものの上手なれ」の諺どおり、どんどんと上達していったのです。

解答4 黒地13目、白地15目で、白の2目勝ちとなります。

解答5 黒地が12目で、白地も12目と同数です。もちろんこういうケースもあるわけで、これは引き分け——囲碁用語で「ジゴ」(持碁)と言います。



さあ、いかがだったでしょうか？

囲碁が最終的に何をめざすゲームなのかがお分かりいただけたかと思えます。

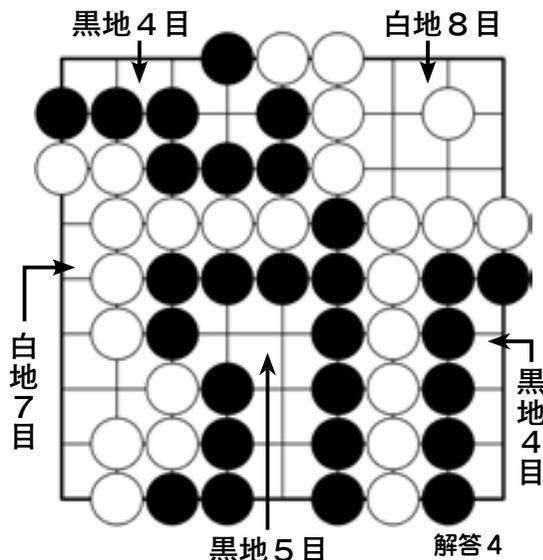
ここまでのお話をご理解いただけたならば、将棋が「相手の王様を取るゲーム」であることに対し、囲碁が「囲った陣地が多い方が勝つゲーム」であるということが、受け入れられたのではないのでしょうか？

この「陣地とは何か？」という概念さえ理解していただければ、将棋のように駒の動かし方の制約がない分、囲碁の方がシンプルで簡単なゲームとさえ言えるのです。

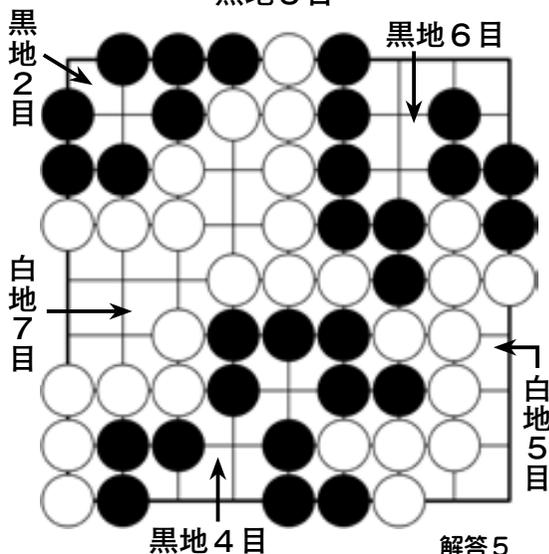
前ページで、私と囲碁の出会いについてお話ししました。はっきりと記憶に残っているわけではないのですが、おそらく囲碁のことだけを考えるような毎日を送っていたのだと思います。

でも、そんな日々の中で、一つだけ鮮明に憶えているのは「同じ年代の子どもで囲碁を打つのが自分だけだった」と寂しかった気持ちです。

兄弟の中で囲碁を打つのは私だけだったので、祖父や父が相手をしてくれて、それはそれで楽しかったのですが、やはりいつしか「子ども同士で囲碁ができれば、もっと楽しいのに…」という思いを抱くようになっていました。少し強くなってからは碁会所(駅前などにある囲碁好きの人が集まるセンター)に連れていってもらおうようにもなりましたが、やはり相手は大人ばかり



解答4



解答5

ですし、タバコの煙がモクモクと…。

ですから小学校一年生の時に子ども大会に出て、初めて同年代の子と打った時には、勝敗云々よりも「うわー、私以外にも囲碁を打つ子どもがいるんだ！」と、本当に嬉しく思った記憶があります。

これから囲碁を始めようと思っている子どもの皆さんは、ぜひ友達も誘って一緒に始めてくださいね。

そして子どもに教えようとしている大人の方は、ぜひ複数の人数を揃えて教えていただきたいと思えます。

次回予告

第1回であった今回はまず、囲碁とは何を目的とするゲームなのか——即ち「地とは何か？」というお話をしました。これで皆さんは、囲碁の大前提を理解したことになります。

ただし、これですぐに囲碁が打てるのか

というとそうではなく、実はもう一つ、

・石を取ったり取られたり

という要素があるのです。

来月号でこのお話をして、この点をクリアしていただければ、いよいよ実戦に入ることが出来ます。

では来月号の当コーナーで、またお会いいたしましょう。

指導者の方へ

私は今回、意図的に従来の入門方法とは異なる手段を採ってみました。ここまでお読みいただいたように「最初に「地」の概念から理解してもらう」という試みです。

ご存知のように、従来は「石の取り方＝ボン抜き」から教えるのが手順とされてきました。

しかし、石の取り方から教え「石を△個取ったら勝ち」といった手法を採ってしまうと、どこかで必ず「実は囲碁とは石を取るゲームではなくて…」と、地の概念を伝える必要が出てきます。そしてこの「石取り→地」への切り替えを教えるタイミングが実に難しく、入門者側も「え、何？」と混乱をきたしてしまうことが多いのです。

この切り替えがなかなかうまくいかないからこそ「囲碁は難しい」と思われてしまうわけで、最悪の場合は、せっかく興味を持ってくれた人を囲碁から遠ざけてしまう結果にもなってしまいます。私がこれまでそうであったように、皆さんもおそらく、この点で最も

苦勞されてきたのではないのでしょうか？

というわけで「だったら最初に、地とは何かを教えればいいのではないか」という考えに辿り着きました。囲碁は「囲った陣地が多い方が勝ち」という大前提を真っ先に示しておくことで、切り替えという従来の困難を取り除くことができたと思ったのです。

では次回以降、どういう手順で話を進めていくのかというと、まずは具体的な石の取り方よりも先に「アゲハマの概念」を理解してもらいます。

——囲碁には石を取ったり取られたりということがありますが、その取った石というのは最終的に、相手の地を埋めるためのものなのです。

ということを理解していただき、それから具体的な「石の取り方および逃げ方」という技術面の話に入っていきます。

従来の入門方法とはかなり異なっているので戸惑われるかもしれませんが、私はこの手法に手応えを感じています。指導者の皆さんも、どうぞ来月号をお楽しみに。